漱石とアーサー・ジョーンズの哲学者について

小 鹿 原 敏 夫

（０）はじめに

『吾輩は猫である』（以下『猫』と略す）の十一章に苦沙弥先生が水島寒月、越智東風両君に自殺を肯定する議論を開陳する。苦沙弥先生は今後、神経衰弱の国民のなかで自殺者が増加するに違いないことを述べ、そしてその自殺者が様々な方法で命を捨てようとすることについてはスティーブンソンの小説『自殺クラブ』(1)を引き合いに出して熱弁をふるう。 以下はその寒月東風両君と苦沙弥先生のやりとりの一部である。

「大分物騒な事になりますね」
「なるよ。慥かになるよ。アーサー、ジョーンスと云ふ人のかいた脚本のなかにしきりに自殺を主張する哲学者があつて……」
「自殺するんですか」
「所が惜しい事にしないのだがね。然し今から千年も立てばみんな実行するに相違ないよ。万年の後には死と云へば自殺より外に存在しないものゝ様に考へられる様になる」

この自殺を巡る議論はそのあと迷亭によって彼の未来記の一部のなかでより極端な議論として展開される。そこでみられる迷亭の自殺に関する意見は漱石自身の英訳本ニーチェの『ツァラトストラはかく語りき』に関する書き入れに酷似していることはよく知られている。しかし苦沙弥先生が引き合いに出したアーサー・ジョーンズ(2)の脚本に登場する「しきりに自殺を主張する哲学者」に関してはこれまで論じられたことがないようである。全集の注（注五三八 4：全集 1 巻 1993）にはアーサー・ジョーンズがイギリスの近代劇の先駆者であり漱石の蔵書に彼の戯曲が以下の三冊残されていることが記されている。

『十字軍』（The Crusaders 初演 1891）
『嘘つき』（The Liars 初演 1897）
『ジェインの策略』（The Manoeuvres of Jane 初演 1898）

これらはアーサー・ジョーンズの戯曲のなかではイギリスの上流階級を舞台にした風俗喜劇（Comedy of Manners）という範疇に入る。さらにこれら三作品はそのなかでも技巧的喜劇（Artificial Comedy）とも呼ばれるものである。つまりそれらは明らかなつくり

ごとの芝居、嘘の芝居ということである。例えば『嘘つき』には人妻に公然と求愛するフォークナーという上流階級の男が出てくる。漱石はフォークナーのような人物は日本人からみれば狂人であると書き入れを残しているが、それは同時代のイギリスでもその通りであったに違いない。しかし技巧的戯曲はそのような非現実的な設定を否定するのではなくむしろすすんで受け入れ、それによって引き起こされる騒ぎにおいて交わされる登場人物の機知に富んだ会話を楽しむものであった。このような戯曲の性格は漱石が所蔵している他の二つの作品にも共通している。しかし漱石はある意味悪ふざけの要素を含んだ技巧的戯曲をあくまで真面目に理解しようとしたと思われる。したがってこれら三作品に対する漱石の書き入れにみられる評価は非常に厳しい[3]。

さて本稿では『猫』の十一章にみられる「しきりに自殺を主張する哲学者」とは漱石も蔵していたアーサー・ジョーンズの戯曲『十字軍』に登場する「バージ・ジョール氏。偉大なるペシミスト哲学者」（Mr. BURGE JAWLE, The Great Pessimist Philosopher）を指すと考える。そして漱石は苦沙弥先生の自殺論のなかで、どのような「哲学者」を念頭においていたのかを探りたい。

（1）アーサー・ジョーンズの戯曲『十字軍』について

苦沙弥先生が『猫』で引き合いに出したと考えられる「哲学者バージ・ジョール」が登場する三幕の戯曲『十字軍』（The Crusaders 初演 1891）の大略について述べる。ここでの「十字軍」は中世パレスチナに遠征した本来の十字軍のことではなく十九世紀末のロンドンの社会矯風を目指す慈善事業を運営する社会改良家たちのことを指す[4]。以下にその梗概を述べる。

【第一幕】

舞台はロンドンの高級住宅街メイフェア。ここに住むシンシア・グリーンスレイドは美しくかつ裕福な未亡人である。彼女には貧しい家庭から出た理想主義者フィロス・インガーフィールドという恋人がいる。彼の影響でシンシアはロンドンの貧しい人々の環境を改善する「ロンドンを美しく！　健康に！　清潔に！」というかけ声に始まる社会貢献事業（ロンドン改良会：The London Reformation Society）に惜しみなく私財を投じている。またシンシアは親友のブレイク夫人と共に環境の悪いロンドン東部で針子として働いていた貧しい子女を集めて環境の良い南西部ウインブルドンにつくった薔薇園で働かせる施設を主宰している。ただしウインブルドン地区の住民からはこの施設が素性の悪い女子をたくさん抱えているということで評判は良くない。二人は慈善活動の更なる発展のために外務大臣でもあるバーナム卿の協力を仰ぐ。このバーナム卿の息子ディックは既婚者であるのにもかかわらずシンシアに横恋慕している。

哲学者バージ・ジョール（以下ジョールと略す）は一幕の後半に初登場する。彼は崇拝者のフィグ氏に伴われてシンシアの邸宅を訪問し、哲学的主著の出版のためにフィグ氏がジョールへの経済的援助を無心する。

一方シンシアの恋人フィロスは中米コスタリカに移民としてロンドンの最貧民七百六

十人を船で送り出していたが、コスタリカ政府が受け入れを拒否したためフィロスがシンシアと結婚の約束を交わしてからコスタリカに向かうところで一幕が終わる。

【第二幕】

舞台はウインブルドンの薔薇園に隣接したシンシアの別荘。第一幕の終わりから一年以上が経過している。コスタリカに向かったフィロスはロンドンから到着した貧民達が暴動と略奪を起こしたのでその責任者として現地に拘束されている。ディックは再びシンシアに言い寄っている。また薔薇園で働く東ロンドンから来た女子たちが風紀上良からぬ行動をしているということでウインブルドンの住民達から強い排斥運動が起こる。

哲学者ジョールはフィグ氏とともに別荘に食客として滞在しているが、ロンドン改良会の活動に冷笑的な態度を示す。シンシアはなかなか帰国しないフィロスに愛想をつかしつつありディックの誘いに引かれる。そんなシンシアの前に違法に帰国したフィロスがある夜突然現れ、変わらぬ愛を告げる。しかしフィロスが去った後ディックがシンシアの寝室を訪れる。

【第三幕】

舞台は第二幕と同じ。第二幕の終わりから一夜明ける。シンシアの寝室を深夜に訪れたディックを目撃したパルサム氏（ロンドン改良会副会長）はそれをフィロスと勘違いする。そしてそれを醜聞として公表すると息巻く。ロンドン改良会の重鎮であるシンシアの醜聞を避けるためにブレイク夫人とバーナム卿は、フィロスと一緒にいたのはシンシアのメイドのフランス人ヴィクトリンであったと言いつくろう。なぜならばヴィクトリンはシンシアとは違って下層階級の女性でしかも外国人（フランス人！）であるのでこのようなことは醜聞とみなされないからである。フィロスも自分の名誉を犠牲にしてシンシアをかばうために自分がヴィクトリンと逢瀬を持ったと証言する。シンシアはこの証言を否定するが、パルサム氏は沈黙の見返りに賭博好きのバーナム卿が持ち馬を全て売却するのならばこの醜聞を公表しないで彼が目撃したのはフィロスとヴィクトリンであったことを受け入れるという取引を申し入れる。バーナム卿はしぶしぶこの条件を受け入れシンシアの名誉は守られる。

このようにウインブルドンの薔薇園は住民の反対運動で挫折し、コスタリカへの移民計画は失敗に終わり、貧民達はロンドンに送還されることになった。フィロスもシンシアの醜聞をその身に引き受けたことで社会的信用をなくしてしまった。そのためロンドン改良会は崩壊し、その夢は振り出しに戻る。しかし劇はフィロスの深い愛に感動したシンシアがひざまづく場面で幕となる。

（2）『十字軍』における哲学者ジョールの役割

さて『十字軍』のなかで哲学者ジョールはペシミストという役割で、ロンドン改良会の指導者で理想主義者フィロス（Philos Ingarfield）の対極にある。つまりジョールは人間の行うことはどんな善意に基づいていたとしてもそれは愚かであり失敗に終わることの

方が多いので、世間のことはあるがままにしておくのが良いと考えるペシミストの立場を代表している。ジョールは世俗的なことを超越したような変人であるが、彼の付き人のようなフィグ氏はジョールを崇拝する俗人である。バーナム卿はプロの政治家として理想主義の価値は認めるが常に現実的な妥協を取ることも辞さない。ブレイク夫人は慈善事業に関わることで自分の社交界での影響力を増進させることに興味がある。シンシアは自分の意見よりも近くにいる強い意見を持った人に影響されやすい人格のタイプを表している。漱石が『十字軍』を「性格的脚本トシテハ上乗ノモノナラズ」と評しているようにこの作品は登場人物がすべて紋切り型で一面的であるという欠点は否めない。

O.E.D.(ed.1989)によればペシミズム（pessimism）ということばは十九世紀初頭までは「考えられうる最悪の状態」という意味であったが、ドイツの厭世哲学が移入された十九世紀末には「世界は最悪の状態であり、すべての事柄は悪い方に向かうというショーペンハウエル（A.Schopenhauer 1788~1860）とハルトマン（K.R.E.von Hartmann 1842~1906）の哲学」という意味に使われるようになったという。『十字軍』における「ペシミスト」（pessimist）とはこのような世界観を持つ人々のことを意味する新しい用法であった。

ペシミストのジョールとその提灯持ちのフィグ氏は、最初に一幕の後半でメイフェアのシンシアの邸宅を訪れる。そしてまた二幕以降のウインブルドンの別荘にも食客として滞在し周りの人々に冷笑的なコメントを浴びせる。劇中ジョールの思想とされているものは明らかにショーペンハウエルのパロディーであることがみてとれる。以下に『十字軍』よりジョールとフィグ氏の典型的な台詞を集めてみた（和訳は私訳である）。

【第一幕】

①ジョールは結婚の非道徳性についてシンシアに語る。

JAWLE. ...There being an immense balance of misery and suffering in every human lot, it necessarily follows that marriage, as the chief means of increasing that misery and suffering, is a criminal and anti-social action...(p.32 Act I)

ジョール 「すべての人間は巨大な苦難と苦しみの狭間にある。結婚はその苦難と苦しみを増大させる最たる手段である。したがって結婚は犯罪であり反社会的である。」

②フィグ氏はジョールの人口増加に対する悲観論を語る。

FIGG. Jawle calculates that at the present rate the human race will infallibly exhaust every possible means of subsistence in six generations!(p.32 Act I)

フィグ氏 「ジョールの計算では現在の調子が続けば人類はすべての資源を次の六世代で蕩尽してしまうとのことである！」

③ジョールとフィグ氏は自殺と人命に対する態度を語る。

JAWLE. （フィグ氏に健康が優れないことを指摘されて）Yes; my vital processes are so abnormally slow that at any moment it may become advisable to bring them to a conclusion...

FIGG. ...Jawle advocates the forcible and abrupt extinction of human life in certain cases-his own included.(p.33 Act I)

ジョール 「はい。私の生命の働き（vital processes）は今のところ非常に鈍磨しているのでいっそのこと終わらせてしまうのが良いのかもしれません。」

フィグ氏 「ジョールは彼自身の命をも含めて場合によれば人命の強制的かつ突然の消滅が許されると主張しているのです。」

④ジョールは大衆を信じないと語る。

JAWLE. I've no faith in talking to people.(p.35 Act I)

（パルサム氏の何故自分の哲学を人々に伝えようとしないのかという問いに対して）

ジョール 「私は人々に説くことの価値を信じない。」

⑤ジョールはロンドン改良会の役員会などに参加する意図はないと語る。

JAWLE. I'm not prepared for any large expenditure of vital force this afternoon.(p.35 Act I)

ジョール 「私はこの午後に自分の生命力（vital force）を無駄に使うつもりはない。」

【第二幕】

⑥ジョールは女性の姿を嫌悪している。

JAWLE. ...The natural outline of the female figure is hideous and repellant in the extreme. (p.58 Act II)

（フィグ氏に女性のフォルムを崇拝する現代の芸術思潮は理解できないと言われて）

ジョール 「まったく女性の自然なフォルムは醜く不愉快なものの最たるものである。」

JAWLE. ...Take your own case. You are supposed to have considerable personal attractions. Analyse your personal attractions. Take a microscope. Look at your hand. (*Taking her hand.*) What is it? A coarse, scaly epidermis, studded with huge bristles-(p.58 Act II)

ジョール （シンシアに向かって）「あなたの場合を例にしてみよう。あなたはたいへん魅力のある人物と見なされている。ではその魅力というものを分析してみせよう。顕微鏡を取り出してあなたの手をみてみると（シンシアの手を取る）何がみえるか？　それはざらざらした鱗状の表皮でところどころに巨大な剛毛が散らばっている……」

⑦フィグ氏はシンシアに早晩ジョールは自殺するであろうと語る。それもシンシアの別荘の敷地にある池で溺死するという。

FIGG. He has finished the last volume of his social philosophy. By the way, what is the depth of that large pond at the end of the grounds?

CYNTHIA. From six to nine feet. Why?

FIGG. Nothing. He contemplated it for more than an hour this morning. I've alaways thought that the end would come by drowning.(p.59 Act II)

フィグ氏 「ジョールは彼の社会哲学の著書の最終巻を完成させたのです。ところで屋敷の敷地の隅にある池の深さはどのくらいですか？」

シンシア 「６から９フィートぐらいですが。何か？」

フィグ氏 「何でもないですよ。ただジョールがそれについて一時間以上沈思していたのです。私は常にジョールの最期は溺死だと思っています。」

⑧ジョールはロンドン改良会が貧しい女性のために運営する薔薇園が地元の人々から排斥運動に会い困難に瀕していることを冷笑する。

JAWLE. (*elated in his melancholy way*) I cannot refrain from a smile when human nature illustrates my theories.(p.65 Act II)

ジョール （憂鬱ななかにも高揚して）「ものごとが人間の本性に関する私の理論どおりに進むと笑わずにはいられないね。」

JAWLE. (*solemnly*) My dear lady. If people will act in direct contravention of those great principles laid down in my philosophy, what can they expect but discomfiture and failure?(p.66 Act II)

（シンシアに薔薇園の評判が悪くなったのを喜んでいるのではないかと批判されて）

ジョール 「（重々しく）奥様、もし人々が私の哲学の偉大なる原則に背いてことを行えばそれは失敗と挫折に終わるのが当然ではないでしょうか？」

⑨ジョールは慈善事業は無用と語る。

JAWLE. ...Nothing can be done! Charity is merely a form of refined selfishness. You see distress; you are pained; to relieve your pain you scatter benefits broadcast, which corrupts both the giver and the receiver...(p.66 Act II)

（それでは貧しい女子たちのために何をしてあげるべきかとシンシアに問われて）

ジョール「何もできることはないのです！　慈善事業というのは洗練された利己主義にしか過ぎません。あなたは他人の苦しんでいるのをみると自分も心に痛みを覚えるのです。そしてその自分の苦しみを和らげるために寄付金をばらまく。しかしそれは慈善を行う者と受け取る者の両方を腐らせるのです。」

⑩ジョールはフィグ氏が発見したというペシミスト詩人に嫉妬する。

JAWLE. ...(*Waddles off slowly right, jealously looking at Figg.*) Radbone!(p.68 Act II)

（フィグ氏がジョールよりも厳格なペシミストである詩人ラドボーンを発見したので今度はラドボーン協会をつくって彼を世に送り出したいと熱心に語るのを横で聞いて）

ジョール（舞台の右手にゆっくりとよろよろと歩きながら、嫉妬深くフィグ氏を眺めながらいまいましそうに呟く）「ラドボーン！」

【第三幕】

⑪フィグ氏はジョールがシンシアの別荘の池で朝食前に哲学的自殺を敢行したと確信する。

FIGG. Mrs. Blake, has Jawle been in to breakfast?

MRS.CAM. No; why?

FIGG. Then the great deed is done! Jawle has set the seal on his philosophy in the large pond at the end of the grounds!(p.93 Act III)

フィグ氏 「ブレイク夫人、ジョールは朝食に現れましたか？」

ブレイク夫人 「いいえ。それが何か？」

フィグ氏 「それでは偉大な事蹟がなされたのです！　ジョールは彼の哲学を敷地の隅にある大きな池で完遂したのです！」

⑫フィグ氏はジョールの自殺は通常の自殺とは違うことを強調する。

FIGG. There is no question of guilt! Jawle's great tragic contempt of human life must not be confounded with a paltry, every-day, newspaper suicide.(p.93 Act III)

フィグ氏 「罪の意識など問題ではありません！　ジョールの大いなる人間の命に対する悲劇的な侮蔑は毎日の新聞でみるようなくだらない自殺と一緒にすることはできないのです。」

⑬さらにフィグ氏はジョールの葬儀の計画についても語りはじめるが、哲学的自殺の期待に反してジョールは朝食の食卓に腹をすかせて現れる。ブレイク夫人が驚くとジョールは次のように説明する。

JAWLE. ...I shall school myself to endure the vast spectacle of human imbecility, selfishness, and emptiness for some short time longer. The word "emptiness" reminds me I have had no breakfast.(p.96 Act III)

ジョール 「私はもうすこし我慢して人間存在の愚鈍さ、身勝手さ、虚無であることの偉大な見せ物を見物することにしました。ところで「虚無」ということばは朝食がまだであったことを思い起こさせますなあ。」

（そしてジョールは前日に食して胃にもたれた仔牛肉のパイ包みのかわりに魚料理を所望し、ついでにシャンベルタンのワインを朝食に注文する。）

これら『十字軍』におけるフィグ氏と哲学者ジョールの台詞をまとめると、ジョールはペシミストであり、人生は苦しみに他ならないと信じている。そして人類全体の未来に悲観的な見通しを持ち、人間が行うどのような作為もその未来を変えることはできないと説く。とりわけ彼は大衆を啓蒙する価値を認めない。しかし他のペシミスト（詩人ラドボーン）を嫉妬するような世俗性も持ち合わせている。またジョールは女性を嫌悪しており、結婚は男性にとって人生の苦しみを増大させる愚の骨頂と主張している。

しかし苦沙弥先生の説明とは異なり、主著を完成させたジョールが煩悶に満ちた人生

を自ら断つことを確信を持って何度も語るのは、ジョール本人よりもその崇拝者フィグ氏である。しかもフィグ氏は引用⑦にあるようにジョールの最後は入水自殺であると信じているのが注目される。しかし、引用⑬のようにジョールはフィグ氏の期待を裏切り、人生は人間の愚行を観察でき、空腹が満たされるのならばさしあたって生きるに値し、美味な朝食とワインがあればなお結構と判断した。これは、ジョールのモデルであるショーペンハウエルがその哲学において自殺を推奨しているように誤解されることが多かったにもかかわらず、実は逆説的に人生の価値は最悪の状態のなかで生きていくことにあると主張していたことを反映していると思われる。

（3）哲学的自殺と漱石

ロンドンから帰朝したばかりの第一高等学校の英語講師であった漱石の授業に出ていた藤村操が日光華厳の滝で投身自殺を図ったのは明治三十六年五月二十二日であった。それは現場に残された「巌頭之感」が示すように日本で初めての哲学的な煩悶による自殺であったと喧伝された。そしてその後、数年間は華厳の滝は青年が自殺をする名所となり、彼らは煩悶青年と呼ばれた。漱石は藤村操の自殺に少なからぬ衝撃を受けたようで、この事件をたびたび作品や書簡で取り上げている[(5)]。『猫』にもこの事件に触れた箇所がアーサー・ジョーンズの哲学者が登場する前の十章にある。苦沙弥先生を訪ねた年の頃は十七、八の不格好な書生である古井武右衛門は、友人にそそのかされて会ったこともない金田氏の令嬢をからかうために艶書を送ってしまったと告白する。放校されることを怖れた武右衛門は苦沙弥先生にどうすればよいか相談したのだが、苦沙弥先生はまったく役に立たないので失望して家を辞す。「吾輩」は次のように評す。

> 武右衛門君は悄然として薩摩下駄を引きずつて門を出た。可愛想に。打ちやつて置くと巌頭の吟でも書いて華厳滝から飛び込むかも知れない。元を糺せば金田令嬢のハイカラと生意気から起つた事だ。もし武右衛門君が死んだら、幽霊になつて令嬢を取り殺してやるがいゝ。あんなものが世界から一人や二人消えてなくなつたつて、男子はすこしも困らない。

武右衛門が辞した後、寒月君も苦沙弥先生に次の様に語る。

> いたづらは、大概常識をかいて居まさあ。救つて御やんなさい。功徳になりますよ。あの容子ぢや華厳の滝へ出掛ますよ。

このように『猫』では華厳の滝で投身自殺をする煩悶青年の姿が戯画化されている。この十章で描かれる戯画化された煩悶青年のイメージは十一章に登場するアーサー・ジョーンズの哲学者ジョールにつながっているように思われる。武右衛門が恋しているわけでもない金田令嬢への恋文のせいで華厳の滝で身を投げれば、世間はそれを哲学的自殺とみなすのだろう。一方『十字軍』の哲学者ジョールは早とちりのフィグ氏によって

哲学的自殺により一生の幕引きをしたと宣言された。しかしジョールは逆に「虚無」ということばから人生の虚無よりも空腹を思い出し朝食に現れた。いったい人が自殺を選ぶ理由は他人には不可解という外はない。漱石が『猫』十一章でアーサー・ジョーンズの『十字軍』に登場するペシミストを苦沙弥先生に持ち出させたのはこのような十章の古井武右衛門のエピソードのつながりを意識したものであったと考えられる。

（4）おわりに

『猫』の十一章で苦沙弥先生は『十字軍』のジョールの例が念頭にあったようにあくまで個人の究極の選択としての自殺を語っていた。しかしこの苦沙弥先生の自殺論は迷亭の手にかかるとより尖鋭化される。迷亭は苦沙弥先生の後を受けて、彼の未来記において自殺の議論を安楽死（当時の用語では安死術）にまで広げる。迷亭は寒月東風両君に語る。

> 「まだ面白い事があるよ。現代では警察が人民の生命財産を保護するのを第一の目的としている。所が其時分になると巡査が犬殺しの様な棍棒を以て天下の公民を撲殺してあるく。……」
> 「なぜです」
> 「なぜつて今の人間は生命が大事だから警察で保護するんだが、其時分の国民は生てるのが苦痛だから、巡査が慈悲の為めに打ち殺して呉れるのさ。尤も少し気の利いたものは大概自殺して仕舞ふから、巡査に打殺される様な奴はよく〳〵の意気地なしか、自殺の能力のない白痴もしくは不具者に限るのさ。夫で殺されたい人間は門口へ張札をして置くのだね。なに只、殺されたい男ありとか女ありとかはりつけて置けば巡査が都合のいゝ時に巡つてきて、すぐ志望通り取計つてくれるのさ。死骸かね。死骸はやつぱり巡査が車を引いて拾つてあるくのさ。（以下略）」

迷亭の未来記はドイツ第三帝国で「生きるに値しない生命の抹殺」を実践した優生学と精神医療を予期しているようだ。このようなナチスの時代の蛮行はまさに漱石が熟読していた十九世紀の進化論とニーチェの哲学を拠り所として正当化されたものであった（10-15：松下 1999）。迷亭（漱石）の透徹した想像力が導き出した帰結は二十世紀に現実のものとなった。

『猫』の「吾輩」も最期にこのような陰鬱な認識を抱くに至る。

> 秋の木の葉は大概落ち尽した。死ぬのが万物の定業で、生きてゐてもあんまり役に立たないなら、早く死ぬ丈が賢こいかも知れない。諸先生の説に従へば人間の運命は自殺に帰するさうだ。油断をすると猫もそんな窮屈な世に生れなくてはならなくなる。恐るべき事だ。

そしてこの後、「吾輩」は人間たちが残したビールを飲み干し水甕に落ちて溺死するの

である。この水甕は「吾輩」にとっての「華厳の滝」であったと思われる。

［注］

(1) 'The Suicide Club'はスティーブンソン（Robert Louis Stevenson 1850~92）の短編集『新アラビア夜話』（1882）にある一話である。漱石は『文学論』（1907）では「自殺組」と訳され、漱石はその梗概を紹介している（210-213：全集 14 巻）。

(2) 評伝（Jackson 1982）によれば、アーサー・ジョーンズ（Henry Arthur Jones 1851~1929） はヴィクトリア朝の地方の裕福ではない借地農家に生まれ、十二才から呉服屋に奉公に出され高等教育を受ける機会はなかった。しかし彼は刻苦と精励による自助努力で戯曲家として成功を収めた人物である。アーサー・ジョーンズの作品で 1878 年から 1930 年までに英国で上演された作品は五十七を数える。そのなかでも彼の出世作と見なされているのが『銀の王』（The Silver King 1882）と『聖者と罪人』（Saints and Sinners 1884）である。特に後者は英国の中産階級に対する強い諷刺を含み、後にバーナード・ショーにこのようなスタイルが踏襲された。またジョーンズは戯曲『仲買人』（The Middleman 1889）では資本家と労働者の問題を取り上げるなど社会問題にも関心をみせているが、基本的にバーナード・ショーとは異なり社会主義的な方法による社会の変革を支持しなかった。ジョーンズは昔から慣習として取り入れられている身分の違い、結婚などの制度にはそれなりの知恵があり、結局双方が妥協することでそれに従っておくのが賢明であるという見方を採った。アーサー・ジョーンズがイプセンの『人形の家』に基づいて執筆した初期の作品（Breaking a Butterfly 1884）では偽善的な結婚生活に失望した妻が夫を捨てるのではなくお互い妥協して同居を続けるという結末に変更されている。このようにイプセンの作品やそれに影響を受けたピネロやショーなどの作品の現代的な歯切れ良さと比べるとアーサー・ジョーンズは旧態依然とした作家といえる。

(3)『十字軍』に関しては、以下のような漱石の感想がみえる（161-163：全集 27 巻）。

〇此脚本ハ作品トシテ Second Mrs. Tanqueray ニ劣ルコト遠シ。去レドモ巧ミニ世態ト人間ノ弱点を描き出して、其下ニ一貫せる主義ヲ示セリ。去レドモ性格的脚本トシテハ上乗ノモノナラズ。事件ノ脚本トシテハ不自然ナルヲ免カレズ。

'Second Mrs.Tanqueray'（『タンクレイの後妻』）は漱石が高く評価するピネロ（Arthur Wing Pinero 1855~1934）の戯曲である。

『ジェインの策略』に関しては、以下のような感想がみえる。

〇結構巧ならざるにあらず。只全編を通じて真個の滑稽なし。一道の光明なし。

『嘘つき』に関しては、以下のような感想がみえる。

〇 Falkner ハ他人ノ女房ニ惚れて横取りをしやうとして平気な男である。是は狂人だ。

〇文明的虚偽的の俗物の集会である。劇として深厚なる趣も何もない。

(4)『十字軍』の初演は 1891 年であるが、アーサー・ジョーンズはロンドンに誕生したばかりの自治体に材を取ったと考えられる。ロンドンにはそれまでひとつのまとまった総合的な自治体は存在していなかったが、1888 年に地方自治法（Local Government Act）が制定されたことで、はじめてロンドン都市部全域を管轄とするロンドン自治体（London County Council 略称 LCC）が 1889 年に発足した。この LCC は 1965 年まで存続し、ロンドンの下水道、道路交通、教育、住宅事情の改善などの事業に大きな成果を残した。アーサー・ジョーンズの『十字軍』に登場

するロンドン改良会は LCC とは違って民間の慈善団体ではあるが、ロンドン都市部の住環境の改善や貧民救済を目指していたことで 1891 年の初演時の観客の多くは発足したばかりの LCC を連想したと思われる。

（5）例えば明治 37 年 2 月 8 日付け寺田寅彦宛の葉書（296：全集 22 巻）に漱石作の「水底の感」と題された虚構の詩作がある。これは藤村操の恋人が後を追って投身自殺し水底で愛によって結ばれるというものである。また『草枕』（明治 39 年）の十二章で主人公の画家が藤村操の自殺を「余の視る所にては、彼の青年は美の一字の為めに、捨つべからざる命を捨てたるものと思ふ。死其物は洵に壮烈である。只其死を促がすの動機に至つては解し難い。……」（148：全集 3 巻）と評している。また『坑夫』（明治 41 年）第二章にも「華厳の瀑」への言及がある。

［参考文献］

Stevenson(1916)：Robert Louis Stevenson. New Arabian Nights. New York Charles Scribner's Sons. 1916

Jackson(1982)：Russell Jackson. Plays by Henry Arthur Jones. Cambridge University Press. 1982

Jones(1905)：Henry Arthur Jones. The Crusaders an original comedy of modern London life. The Macmillan Company. 1905

全集：『漱石全集 1 巻「吾輩は猫である」』1993.『漱石全集 3 巻「草枕」』1994.『漱石全集 5 巻「坑夫」』1994.『漱石全集 14 巻「文学論」』1995.『漱石全集 22 巻「書簡上」』1996.『漱石全集 27 巻「別冊下」』1997. 岩波書店

松下（1999）：エルンスト・クレー著．松下正明訳『第三帝国と安楽死〔生きるに値しない生命の抹殺〕』1999. 批評社

（おがはら　としお・本学文学部非常勤講師）